
べてるの家の防災プロジェクト

～助け合いをキーワードとした障がい者と地域との防災対策づくり～

社会福祉法人 浦河べてるの家

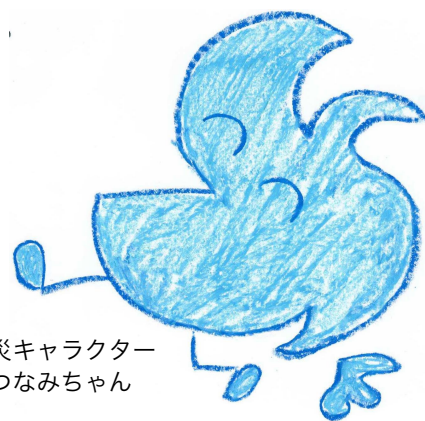
協力 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所
NPO法人 支援技術開発機構 (ATDO)

平成20年3月





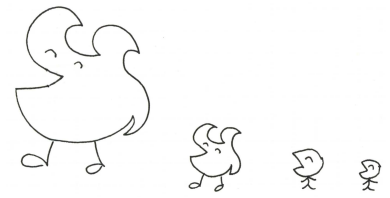
もくじ



べてる防災キャラクター
つなみちゃん

I.はじめに	2
II.今年度の目標と取り組みの計画	4
III.活動報告	6
1. 避難訓練	6
安心の秘訣1～DAISY避難マニュアル	12
2. 地域自治会との協力・防災活動への参加	18
3. 他地域の視察と防災イベントの開催	21
4. 他の障がい者施設との連携	23
安心の秘訣2～避難グッズ	24
IV.この取り組みからみえてきたこと	25
V.さらによくする点～今後に向けて～	26
VI.国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所から	27

1.はじめに



べてるの家とは

浦河べてるの家（以下、べてる）は、主に精神障がいを抱える10代から70代までの100人以上の当事者たちの活動拠点である。べてるでは30年以上前から「弱さを絆に」、「病気でまちおこし」などをキャッチフレーズに、精神障がい者が地域のなかで暮らし、地域に貢献することを掲げてきた。

従来、経済的に負の要素であるとみなされてきた精神障がいを抱える当事者にとって、地域経済の弱体化は当事者自身の生きづらさを加重するものと考えられてきた。しかし、べてるでは「自立」とは、「一人でなんでもできる」ことではなく、「一人では何もできないからこそ助け合いができる」というところにあるという自立観を中心に据え、様々な苦勞の体験を好条件として活かし、「地域のために精神障がいを抱える当事者の力を活かす」ことを目指している。この活動の蓄積は、年間2500人の見学者が訪れるような、過疎の町の一角を支える「地場産業」ともなっている。幻覚や妄想を語り合う「幻覚&妄想大会」、当事者が自分自身の経験を課題として取り上げ、仲間とともに研究する「当事者研究」などは、世界における最先端の精神医療の試みであるとして精神障がい者福祉の分野で広く注目を集めている。



べてるの防災の取り組み

べてるのある北海道浦河町は太平洋に面した人口1万5千人の小さな町で、襟裳岬に近い。同時に、国内有数の地震地帯にあり、地震・津波への備えが欠かせない。平成19年には日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震防災対策推進地域の指定を受け、500年間隔地震、浦河沖・十勝沖・三陸沖北等で発生する地震にともなう津波対策の必要性が改めて確認されたところである。

平成15年に発生した十勝沖地震による被害を受け、べてるも地域で安心して暮らすための防災の取り組みを進めた。特に平成16年度以降は津波対策に重点をおき、町行政および国立身体障害者リハビリテーションセンター（以下、国リハ）と共に情報提供方法の開発と避難計画の立案を進めた。平成19年度は、その知見を用いて、厚生労働省から「平成19年度障害者保健福祉推進事業（障害者自立支援調査研究プロジェクト）」の認定を受け、べてるの活動拠点・住居からの避難マニュアルを作成し、避難訓練を実施した。また、より避難困難な状況への対応や、津波危険時に実際に避難するためには、同じ地域に住むひとびととの連携が不可欠であるため、町役場、地域自治会などの協力を得て、下記の項目を実施した。

べてるの家の防災プロジェクト（2007）

1. 精神障がい者の津波等防災活動の発展
2. 障がい者関連施設と自治会・周辺住民との連携方法の開発
3. 町内要援護者施設と連携したさまざまな障がいに対応した防災活動の開発

防災も研究すればいい！

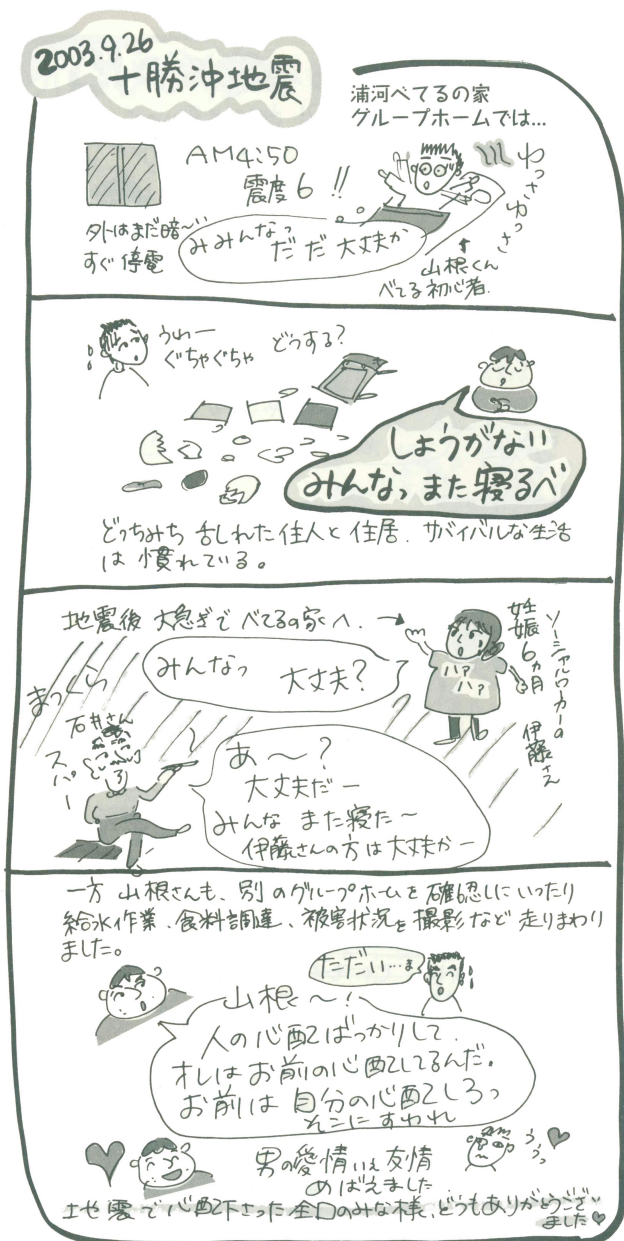
べてるでは、SST (Social Skills Training) という生活技能訓練を大切にしている。SSTとは生活や病気の苦勞や、その背景にある認知や行動上の苦勞を具体的な課題として挙げ、ロールプレイをしながらコミュニケーションの練習をする認知行動療法のひとつで、べてるでは参加した仲間の正のフィードバックやスキルのモデリングの場として活用されている。

近年では、SSTを発展させた当事者研究（自分たちの生活課題を研究テーマとして取り上げ、メンバーそれぞれが対処方法を編み出そうとする実践活動）が活発になり、不安があっても「学ばばいい」「連取すればいい」「研究すればいい」というスタンスがメンバーにもスタッフにも定着している。

この共通認識のもと、既存の防災に関する事前の知識と安全確保のポイントを明確にした上で、防災も研究／練習すれば良いというスタンスで防災事業に取り組んだ。これが日常的に当事者研究やSSTを実践しているメンバーにとっても、防災への取り組みを身近な、具体的なできごととして体験する背景となっている。

地域で安心して暮らすために

地域で生活するためには色々なスキルや知恵が必要だ。入院している時には病院の職員とともにいるため、いざというときでも安心感がある。しかし地域生活を送っているメンバーは自分たちで身の安全を確保しなければならない。障がい者や高齢者は災害時に逃げ遅れる可能性が高いといわれているだけに、避難計画や避難マニュアルにも工夫が必要である。退院促進支援事業が進む今日、こうした取り組みの十分意義あることである。べてるのメンバーたちにより安全を確保するための工夫・開発が進められれば、それは地域のほかの障がい者や高齢者にも活用できるプロトタイプとなるだろう。



十勝沖地震後のべてるのお店で呆然とする佐々木実社長。

II.今年度の目標と取り組みの計画

取り組み1：避難訓練の実施

精神障がい者の津波防災活動の発展

各活動拠点・住居からの避難計画の作成と避難訓練の実施を目標とした。

べてるでは精神障害者小規模通所授産施設（2ヶ所）と販売場所（1ヶ所）（平成20年4月より、就労継続支援B型事業所1ヶ所）、グループホーム（以下、GH）3ヶ所・共同住居10カ所の運営・支援を行っている。いずれも集団活動や共同生活の場であるにもかかわらず、災害時の対応については方針があるのみで、具体的な避難マニュアルが明確にされていなかった。そこで、本年度は最も短時間で避難が必要とされる津波被害を想定して、津波による被害の可能性がある標高10メートル以下に立地するべてるの家の日中活動の拠点、グループホーム、共同住居、ならびにべてるが直接経営してはいないが、メンバーが集まって住んでいる一般住宅を対象に、それぞれ避難計画を立て、夏期および冬期の避難訓練を行うことを目標とした。



目標は4分で標高10メートル！

避難訓練の進め方（国リハ）

- 1 避難場所を選ぶ：避難場所の条件として、それぞれの活動拠点や住居から4分以内で辿り着け、標高10メートル以上の場所であること、かつ冬期には十分に高いところを伝って暖房のある建物に辿り着ける場所が望ましい。
- 2 避難場所までの経路を確定する：1に基づいて、各々の活動拠点・住居から避難場所までの経路を確認し、メンバー自身が歩いて確認する。その結果をDAISY技術を用いて避難マニュアルにし、理解が困難なメンバーにも理解できる形で提供する。
- 3、避難訓練をする：避難訓練にあたっては、DAISYの避難マニュアルを見て経路を確認した後避難訓練を行う。また、該当地域の自治会、商店会等への呼びかけを行い、避難訓練を契機として、地域での結びつきを強めることをめざす。
- 4、振り返りをする：べてるの家の日常の活動の長所を活かし、メンバー自身により課題を報告しあうこと、及び訓練終了後に「よかった点、さらによくする点」を相談しあう振り返りを取り入れる。
- 5、防災グッズを備える：共同住居ごとに避難に障害や病気の状態にも配慮した防災グッズを備える。

取り組み2：連携方法開発

障がい者関連施設と自治会・周辺住民との連携方法の開発

本事業をすすめるにあたり、随時、町役場および町内自治会と連携をとり、それぞれの情報を共有する会議を開くことを目標とした。また町役場と地域自治会との連携の中で、築地地区の防災訓練にニューべてる、セミナーハウスも参加することを目標とした。

取り組み3：他障がい者向けの防災

本事業を進めるにあたり、町役場および町内障がい児・者施設と連携をとり、災害時に予想されるニーズとそれらへの対策に関し、情報共有のための会議を開くことを目標とした。これにより、将来、町内の要援護者施設と連携した様々な障がいに対応した防災活動の開発が進むことを目的とした。

取り組み4：その他

(1) 浦河で想定される災害と類似の災害体験を持ち、防災プロジェクトが盛んな地域を訪問視察し、互いの津波対策の知識や体験について情報交換する。

(2) 国内外から防災に関する専門家呼び、他地域の津波等防災対策の知識と浦河のそれとの情報交換を行うイベントを開催することを目標とした。上記のイベントでは、べてるで行ってきたこれまでの防災活動の取り組みの成果に関して、防災取り組み内容、避難マニュアル、使用ツールなどを町民に展示・公開すると共にインターネットを通じて国内外に発信する。

これらを通じて、他地域の取組を浦河町での防災活動に活かすことおよび今後の継続的な交流や意見交換のためのネットワークを築く。



べてるの活動拠点（青）・住居（オレンジ）・避難場所（黄色）

III.活動報告

1. 避難訓練

今年度は、津波による被害の可能性がある標高10メートル以下に立地する、べてるの活動拠点と住居すべてにて避難訓練を行った。

活動拠点：ニューべてる、べてるセミナーハウス、4丁目ぶらぶらざ

GH：べてる、潮見ハイツ、フラワーハイツ、ぴあ

共同住居：みかん、ひかり、おざき荘、レインボーハウス、駅前ハウス

一般住宅：しおさい荘、きれい荘、武田ハウス

※べてるにはこの他にリカウスというGHがあるが、十分な標高があり、津波による被災の可能性はほぼないことから、本年度の避難訓練の対象からははずした。

活動事例 その1

日中活動拠点／住居からの避難訓練

4丁目ぶらぶらざ・共同住居レインボーハウスからの合同避難訓練（通常期避難訓練）

4丁目ぶらぶらざは浦河町内の大きな商店街、大通り4丁目の3階建ての1階にあり、べてるの商品や町内の他店の商品を売っている。誰でも気楽に立ち寄ってぶらぶらしてもらう場所という意味で「ぶらぶらざ」と名づけられた。店舗としての性格上、メンバー以外にお客様がいる可能性が高いので、非常時には安全に避難場所までお客様を誘導する必要がある。

4丁目ぶらぶらざの2階、3階は女性だけの共同住居（レインボーハウス）となっており、現在8名のメンバーが暮らしている。平成18年度には共同住居に住むメンバーで避難訓練を行っている。今年度は4丁目ぶらぶらざ、レインボーハウ



さあ避難訓練開始！

とともに冬期・夏期両方の避難訓練を実施した。特にレインボーハウスでは冬期夜間の訓練を実施した。

a) 事前準備

・レインボーハウス：住居ミーティングにて、12時間避難先に滞在することを想定して、どんな避難グッズが必要か話し合い、準備した。

・4丁目ぶらぶらざ：8月7日の「4ぶらミーティング」において、かつて経験した災害について話し合った。十勝沖地震や阪神大震災での体験や、「寝るときにはいつもスリッパと眠剤はいつも用意している。ガラスが落ちたら歩けないし、眠剤なしでは避難してもバテてしまうから」という知恵などが出された。

b) 避難訓練

8月28日(火) 13:30～

十勝沖地震発生による津波警報が発令されたという状況を想定し、この日の店番担当者の誘導での避難訓練を実施した。

まず、メンバースタッフの司会による「4ぶらミーティング」を開き、みんなで避難訓練の意義について話し合った。次にDAISY版避難マニュアルを見て避難経路を確認し、参加者の役割(先導する人、後方確認する人、車椅子を押す人、車椅子に乗る人、歩行に困難がある人の手を引く人)を決めた。入り口近くにいたメンバーが自動ドアのスイッチを切り替え、手で開ける作業を担当した。全員が一斉に避難体制へ入るために、地震発生にはカウントダウンを行った。

本訓練では、最後尾の人が目標地点(標高10mの高さ)に到着するまで4分35秒だった。訓練を繰り返すともう少し早くなると推測される。

参加人数約50名: べてるメンバー25名 見学者10名 学生・スタッフなど関係者10名 他福祉施設スタッフ5名

c) 避難の様子と振り返り

①歩行に困難のあるメンバーの避難に関して

あるメンバーは、日常生活では一人で対応できる一方、スピードが求められる津波や火災など避難時についての不安を感じており、どのように支援するか皆の課題となっていた。今回は仲間の手を引いてもらいながら避難場所まで自分で歩いた。実際にやってみると、仲間の助けがあれば避難先に行けるので、支援の重要性を実感したという。また汗で手が滑ってしまうので、ハンカチを握るなど手のつなぎ方の工夫が生まれた。

【本人のコメント】

当日は体調も悪く、本当に不安だったのですが、仲間の力を借りることが出来て本当に助かった。私は地域で一人暮らしをしているので、これはいざという時、誰かに応援をお願いしようかなと思った。



②車椅子に乗ったメンバーの援助に関して

災害時に車椅子で移動することが適切と思われるメンバーが、避難用車椅子に乗り、仲間の協力で全行程を避難することができた。ホームヘルパーの経験を持つメンバーが車椅子の押し方を指導した。ただ車椅子のタイヤの空気が抜けていたため車椅子で坂道を上るのがとても大変で、4人体制でやっと押していった。

【よかった点】

大勢での訓練だがスムーズにできてよかった。

住居の仲間がたくさん参加できてよかった。

レインボーハウスに住む人で、なかなか住居の人やスタッフも日常的には会っていないメンバーが参加し、話すことができた。

【さらによくする点】

車椅子の日常的な点検が必要だと実感した。

4ぶらは店舗なので、体格の違うお客さんのために車椅子を3台用意してはどうか。

車椅子だけでなく、杖などを検討してはどうか。

寝ているときとか、靴をはいてから出るというのをやってみたかった。

今後周りの商店とも合同で避難訓練を行いたい。



レインボーハウスからの冬期避難訓練

a) 事前準備

夏の避難訓練前に防災グッズの準備は完了していた。夏期の訓練以降、新しく入居したメンバーがおり、冬期の夜間訓練も初めてだったので、当日、避難訓練直前に住居のメンバー（2人）と国リハスタッフで避難経路を下見した。DAISYの避難経路マニュアルの写真をその日の写真に入れ替え、避難訓練直前に全員で確認した。その際、最終目的地であるファミリースポーツセンターまでの道のりでは風が冷たいので、避難先は標高10m以上にある測候所とすることに決め、また積雪のため滑りやすいなど冬期の注意点も確認した。



雪道の中、上りきった清水さんと泉さん。

b) 避難訓練

1月18日（火）17時30分～

住居からの火災発生及び津波警報発令を想定し、各居室から避難場所（測候所）へ避難した。地震発生のカウントダウンの後、それぞれの居室に声を掛け合いながら1階までおり、屋外に出た。冬期夜間で雪が凍って非常に歩きにくい状況だったが、全員が約5分で目標とする標高10mの地点に到達することができた。

参加人数10名：共同住居レインボーハウス入居者6名、ベテランスタッフ1名、国リハスタッフ3名

c) 振り返り

【よかった点】

外は寒かったが、防寒シートは暖かった。

避難グッズを背負って行って見て、反射板が光るのがよかった。

雪が積もったところの方がかえって歩きやすかった、それがわかってよかった。

避難マニュアルの音声が同じ住居のメンバーの声で、なじみがあって安心した。

測候所まで意外と近く、スポーツセンターまで上がると大変だけど、安全な所までであればそれほど慌てなくても大丈夫だとわかった。

【さらによくする点】

凍っていて滑りやすいことで苦労したが、両手を使えるようにしておくことが大事だと思う。

玄関のライトを抜いて持っていくことを忘れたので、そのことがずっと「お客さん」となって頭に残っていた。

今回は十分に防寒対策ができたが、必ずしもいつもその状態で避難できるとは限らないが、靴下を準備しておくなど、いろいろ工夫ができそうだと思う。アルミの防寒シートは上手に使うことはできるのではないか。

津波への対応ではないが、避難梯子の使い方も練習したいと思った。



レインボーハウスでの振り返り。

4丁目ぶらぶら座からの冬期避難訓練

a) 事前準備

DAISY作成チームのメンバーが国リハスタッフとともに避難経路を確認し、冬期版DAISY避難マニュアルを仕上げ、事前のミーティングにてこの避難マニュアルを見て、避難経路を確認した。また転倒や怪我をしないよう、防災みなみ体操を行った。レインボーハウスから防災グッズを借り、担当のメンバーを決めて避難所まで運ぶ体験をした。また坂道を登りやすいように、車椅子に防災グッズで購入した紐をつけた。そのほかトランシーバーの使い方を学び、避難誘導者、中間、最後尾を担当するメンバーが実際に通信しあい、全体の状況を確認しつつ避難した。

なお、冬期避難訓練には消防署の方に監督をお願いした。

b) 避難訓練

2月27日（火）14時00分～

参加人数39名：消防署2名、べてるメンバー30名、べてる家族1名、べてるスタッフ1名、そのほか2名、国リハスタッフ3名



活動事例 その2

その他の日中活動拠点からの避難訓練

ニューベてるからの冬期避難訓練：築地地区



ニューベてるは現在のべてるの家の中心的な活動拠点であり、法人本部および二つの作業所の事務所もここに置かれている。毎朝行われる「朝ミーティング」をはじめ、「SST」、「金曜ミーティング」、「グッズミーティング」など様々なプログラムが行われる。また昆布詰めやTシャツ作成などの作業の場所でもある。平成18年度にも夏期の避難訓練を行った。

a) 事前準備

前日、DAISY作成チームメンバー1名、ニューベてるを利用しているメンバー1名が、国リハスタッフ（2名）とともに避難路の確認、写真を撮影した後、冬期の避難マニュアルを準備した。

b) 避難訓練

1月18日（金）13時30分～

冬の昼間、作業中に、十勝沖地震による作業所の火災発生及び津波警報が発令されたという想定で、作業場（1階）から避難場所への避難訓練を行った。

避難訓練開始直前に徳島県美浜町作成の「防災みなみ体操」で準備運動をし、避難マニュアルにて避難経路を確認した。訓練後、全員で振り返りを行い、災害時非常食を試食した。



ニューベてるから車椅子を引いて避難した。

参加人数44名：べてるメンバー27名、べてるスタッフ7名、浦河赤十字病院スタッフ・家族会・ボランティア4名、国リハスタッフ3名、来客者3名

c) 振り返り

避難経路を冬雪の少ない道路にしてよかった。

体操をして体があったまった。

雪道の坂で車椅子が大変だった。

セミナーハウスからの冬期避難訓練

：築地地区

セミナーハウスは、小規模授産所浦河べてるの活動拠点として製麺作業をしたり、大人数の研修施設としてお客さんを迎えたオリエンテーションをおこなったりする施設と、2つの共同住居（みかん・潮見ハイツ）のある複合施設である。平成18年度には昼・夜2回の避難訓練を行った。

セミナーハウス



DAISY版避難マニュアルをみんなで見る。

a) 事前準備

昨年3月に行った避難訓練の写真でDAISY避難マニュアルを作成した。

b) 避難訓練

2月22日（金）16:00～

今回は消防署の方から指導を受け、消火器の使用訓練を行った。その後、セミナーハウス内の1室に集まりトランシーバー利用方法についてDAISYで確認し、ニューべてるのスタッフと通信練習をした。避難訓練直前に、役割分担を決めた（先頭（1名）、最後尾（2名）、車椅子を押す係（2名））。雪道での転倒防止を防ぐため、防災みなみ体操で準備運動をした。

スタートの合図（スタッフ）で、一斉に避難開始した。最後尾が10メートルに達するには約8分かかったが、道路横断時の信号待ち、踏切遮断機があがるまでの待ち時間を差し引くと、もう少し短かったと思われる。

参加人数22名：べてるメンバー10名、スタッフ3名（うち1名は留守番）そのほか（国リハ・防災フォーラムシンポジストを含む）9名

c) 振り返り

【よかった点】

事前に経路を確認してから避難できたので、以前よりスムーズにできてよかった。

DAISYのマニュアルに自分たちの顔がでてきて、自分たちのための避難マニュアルだなと実感できて、やっぱりDAISYはいいなと思った。

消防、警察、支庁など、地域の資源となる人たちにべてるの避難訓練を知ってもらうことができてよかった。

みんなまとまって避難できてよかった。

今、ホテルのフロントで働いているが、べてるでの避難訓練の体験を自分の仕事に活かせると思う。べてる以外の場所でも人が集まりやすい場所に応用できるといいと思う。

最後尾の人がきちんと確認できていてよかった。



セミナーハウスからの避難経路



避難先からランシーバーで連絡

【さらによくする点】

避難マニュアルを流れとして見られるようなものがもう一つあるといいと思った。

これまで大きな地震を浦河で経験したが、いざという時にはパニックになるので、どんなことが起こるか、またどうしたらよいかについて日々伝えていくことが重要だと思う。

スタッフがいない夜間にどうやって避難できるかがいつも気になっている。住居のメンバーでまたやってみたい。

<お客さんから>

「楽しく」避難訓練をしている要素があったのがよかった。災害が怖いのはみんな知っているが、楽しくないと続かないので、こんなことをやろう、あんなことをやろうというアイデアが出てくるような楽しい訓練が大事だと思う。近所の建物などの防災資源をもっと活用する方法は工夫できるのではないかな。

地震の研究者として予知が実現していないことは申し訳ないが、今後も一緒に考えていきたい。

安心の秘訣1～DAISY避難マニュアル

DAISY(Digital Accessible Information System)とは、音声とテキスト及び画像を同時に表示するデジタル録音図書のこと。DAISYは、同時に複数の感覚器官を通じて情報を提供できるため、認知に障がいのある精神障がい者などに対する有効な情報伝達手段のツールとして活用されている。

べてるでは、各活動拠点・共同住居ごとの避難マニュアルをメンバー自身の手で作れるようになることを目標として、活動を行った。



第1回講習：平成19年9月10日～13日

既存の防災マニュアルを編集して、季節、時間、住居ごとに対応したマニュアルを製作することを目標として講習会を行った。講習会は、録音環境のため人の出入りの少ない部屋で行われ、メンバーは、他の仕事や体調とのバランスをとりながら講習に参加した。3名以外のメンバーも、経路を歩くモデルやカメラ撮影等で製作に協力した。

試作展示：平成19年10月31日

防災フェスタにて、DAISYチームは、自身で製作したDAISY版防災マニュアルを展示した。写真や声で知っている人が登場するのを見て興味を持つ参加者がいた。

第2回講習：

撮影された避難経路の写真をもとに、初めからDAISY製作できるようになることを目標として講習会を行った。住居からの避難経路マニュアルの製作の他に、べてるネットから、メンバーの退院記録の記事をDAISY化して、普段ホームページを読まないメンバーにも分かりやすいと好評であった。

第3回講習：

フォローアップとして、これまで製作して出てきた疑問を解消することを目標として講習会を行った。ファイルやフォルダの管理が特に難しかったが、できたものはCDに焼いて目に見える形で管理することになった。べてる祭りに向けて、DAISYで近所のお店の紹介を製作したいという意見も出た。



一年間の振り返り

DAISYに関わってよかったことは、防災の取り組みとしてべてるで新しい仕事ができただけです。また、病気の苦勞によって普段は集中しにくい仲間にも、わかりやすく避難経路を伝える事ができました。べてるで起こった出来事をDAISY図書としてまとめるなど、避難マニュアル以外にもDAISYを活用できるようになりました。

活動を始めた頃はマニュアル作成の手順を難しく感じたり、しばらくやらないと忘れてしまうという苦勞もありましたが、だんだん身に付いてきました。

今後は定期的にミーティングなどの活動を行い、これまで身につけた技術を応用して、べてるの仕事マニュアルや、退院してくる仲間のためにゴミ出しやそうじ、洗濯といった生活のスキルを伝えるDAISY図書も作ってみたいです。(DAISYチーム今堀彩・川端俊・伊藤知之)

活動事例 その3

共同住居からの避難訓練

しおさい荘、フラワーハイツ・ひかり、きれい荘からの冬期合同避難訓練：東町うしお地区

浦河高校を避難場所としている共同住居（3カ所）のメンバーが協力し、合同冬期避難訓練を実施した。

参加した共同住居とGH

1. しおさい荘

しおさい荘には11名のメンバーが暮らしているが、海岸線近くに立地し、地震発生後、迅速に避難する必要がある。

2. フラワーハイツ

フラワーハイツには合計6名のメンバーが暮らしている。幻覚、妄想が強いメンバーもあり、避難訓練では彼らと一緒に避難するための工夫が必要だった。



フラワーハイツ

3. きれい荘

きれい荘は4名のメンバーが暮らしている。浦河高校に最も近い共同住居の1つだが、避難訓練は今回が初めてであり、避難経路での注意点、危険箇所を確認した。



a) 事前準備

浦河高校と避難訓練実施の連絡をし、前日までにしおさい荘、フラワーハイツから避難経路を踏査し、冬場の留意点を確認した。

b) 避難訓練

2月26日16時半～

各住居にて最新のDAISY版避難マニュアルによる経路の確認、防災みなみ体操、先頭・最後の担当、防災リュックや懐中電灯を持つ人の確認をした後、トランシーバーを使って3地点から同時にスタートした。しおさい荘からは、これまで他のメンバーとともに行動する機会がなかったメンバーが参加し、総勢10名となった。いずれの住居からも、雪道の中でも整然と避難することができた。避難訓練後は消防署の方から総評をいただき、全員フラワーハイツに戻り、合同で振り返りを行った。

参加人数20名：①しおさい荘・武田ハウス：入居者8名、スタッフ1名、ATDO1名、②フラワーハイツ・ひかり：入居者4名、スタッフ2名、国リハ1名、③きれい荘：入居者2名、国リハ1名





フラワーハイツでの合同振り返りMT

c) 振り返り

【よかった点】

防災グッズを持っていったがあまり重くなかった。（しおさい荘）

きれい荘からは2名参加でき、雪道も経験できてよかった。4分以内に間に合うことがわかってよかった。避難グッズの用意をしていないので困ったなと思った。（きれい荘）

今日は幻聴さんが静かだった。黙ってついてきてくれた。（フラワーハイツ）

トランシーバーがどこまで届くかを確認できてよかった。

【さらによくする点】

しおさい荘では、きれい荘・フラワーハイツからの音がよく聞こえなかった。きれい荘・フラワーハイツ間は聞こえた。今後、中継に携帯電話を使うなどの対策を含め、連絡の取り方も考えていけるといいと思う。

しおさい荘では、2階の人は靴を上においているので、下でミーティングをしているときに靴をどうするか困った。1階に普段はかない靴またはスリッパなどおいておくともよいかも知れない。

引きこもっている人のところの部屋は鍵を開けてもいいのか分からないので、いざというときにどうやったら出てくることができるか、今後、対応

を考えていきたい。

今後、高校の中に入る練習もしてみたい。中に入れてからどこに行けばよいか、知っておく必要がある。



各共同住居からの避難訓練

GHぴあ・おざき荘からの通常期避難訓練

：東町地区

GHぴあ・おざき荘は浦河赤十字病院に近く、しばしば退院にむけて外泊訓練が行われている住居である。退院促進支援事業において地域生活の



活動拠点となり、入居者であるピアサポーターが彼らの応援に活躍している。

今年度は通常期、冬期ともに避難訓練を実施したが、いずれも退院準備のため外泊中のメンバーがピアサポーターとともに参加した。

a) 事前準備

平成15年の地震では浦河赤十字病院へ避難しようとしたメンバーもいたため、おざき荘では、津波浸水による孤立を避け、安全に過ごす場所として、東町第5自治会が管理する「ふれあい会館」が避難先であることを確認した。そして4分以内に10m以上の高さまで避難すること、おざき荘の位置、高さ、避難先・ふれあい会館の位置と安全な避難経路を確認し、自治会から許可をいただいで避難訓練を実施した。

事前ミーティングでは、4丁目ぶらぶらざからの通常期避難訓練に参加したメンバーから、日中活動の場所からの避難経路がわかったので、今度は住居からの避難経路を知りたいという発言があった。

b) 避難訓練

9月26日(水) 16:00～

参加人数11名：おざき荘入居者7名、べてるスタッフ3名、国リハ1名

住居ミーティング中に、十勝沖地震発生に伴う津波浸水警報が発令されたという想定で避難訓練を開始した。避難訓練では、居間の扉を開ける人など役割を決め、カウントダウンにより地震発生とした。

C) 振り返り

ドアを開けること、玄関を出たらどの方向に逃げるのか分からず戸惑った。

一度やってみると、どこに避難すればよいか分かる。何度も繰り返しやるといい。

GHピア・おざき荘からの冬期避難訓練

a) 事前準備

雪が残っているため事前にメンバーと国リハスタッフが避難経路を確認し、DAISY版避難マニュアルを作成した。舗道には氷が張っていて滑りやすいので注意する旨、メンバーから報告された。

b) 避難訓練

1月30日(水) 15:30～

冬期避難訓練では各居室に在室中に地震発生という想定で訓練を行った。避難には、レインボーハウスの防災リュックとアルミシートを試用した。すでに防災グッズを準備していたメンバーもあり、その防災グッズを用いて避難した。避難訓練後には、非常食を参加者で試食しながら振り返りを行った。

参加人数10名：ピア・おざき荘入居者7名、べてるスタッフ2名、国リハ1名



C) 振り返り

通りに出る際、逆方向へ曲がってしまったメンバーがいたので声をかけた。けれども帰り道に自分が歩道凍結のため転びそうになり、スタッフに助けられた。気をつけたい。

避難訓練に参加できてよかった。

夜の避難訓練ができてよかった。

しおさい荘からの通常期避難訓練：東町うしお地区

しおさい荘から浦河高校まで避難するためには、川を渡らなければならず、津波や鉄砲水に襲われる非常に危険なルートを進まなければならない。そのため、夏期避難訓練では土地を所有されている方の許可を得て、山側に逃げる避難経路による避難訓練を行った。

a) 事前準備

8月27日、山道を登るため、通り道を確保すべく、土地の所有者の方と一緒に草刈をしながら経路を確認した。個人の所有地であるが、いざというときにはしおさい荘のメンバーが上がってもよいという許可をいただいた。

b) 避難訓練：

9月28日14時00分～

10月4日14時00分～

再び所有者の方の許可を得て、所有者の方とともに避難訓練を行った。直前までの降雨のため、足下が滑りやすいことに注意すると確認しあった。避難訓練に参加できなかったメンバーは、翌週、参加メンバーとともに自主的に避難訓練を行った。これには、通常の住居ミーティングよりはるかに多いメンバーが参加した。いずれの避難訓練でも全員が3分30秒で標高10mの高さまで登ることができた。

参加人数のべ12名：しおさい荘入居者9名、国リハ2名

C) 振り返り

【よかった点】

山道を通して逃げられるとわかってよかった。

【さらによくする点】

眠っている人と一緒に全員安全に避難するにはどうしたらよいか。鐘を鳴らしたり、大声を出したりするなど、考えなくてはならない。

夜の避難は道や雨のとき滑るのかもしれないので、気をつけたい。

フラワーハイツ・ひかりからの通常期避難訓練：東町うしお地区

a) 事前準備

DAISYチームのメンバーが、ATDOスタッフの指導を受けながらフラワーハイツから浦河高校までの避難マニュアルを作成した。避難経路には車道脇を進む道と住宅の間を抜ける近道があったが、事前確認により、住宅の間にある近道は、雨上がりにはぬかるんでいて歩きにくく狭いことが分かり、地震直後は危険だろうと推測した。

b) 避難訓練

10月30日（火）17時00分～

住居ミーティング中に、浦河沖等を震源とする地震により津波警報が発令されたという設定で、住居から避難場所（浦河高校）への避難訓練を行った。前日雨が降ったため、避難場所へ向かう

往路は道路を通り、復路にわき道（泥道）を通った。話しながら、笑いながらだが、信号待ちの時間を除いて正味4分30秒で浦河高校校門前に到着した。

参加人数11名：フラワーハイツ入居者4名、ひかり入居者3名 応援団1名、スタッフ3名、国リハ3名

c) 振り返り

【よかった点】

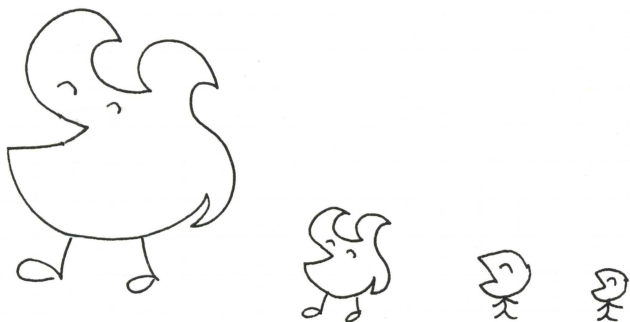
幻聴さんの声がうるさくてもしっかりDAISYを見ることができてよかった。

どこに行けばみんなに会えることがわかってよかった。

【さらに良くする点】

住居にいたけれども参加できなかった人が3名いた。幻聴で途中で避難するのをやめてしまった人もいた。（Tシャツの上にジャンパーを着た後にも「マメ幻聴」のために部屋に入ってしまった人、人が多いから行けないという人、直前でやめてしまった人）。避難場所に着いてからも大勢の人がいるわけなので、幻聴に対しての対応、避難先で病気とどうやって付き合っていくか考えたい。

浦河高校の2階／3階への上がり方を知りたい。浦河高校への依頼を準備していければいいと思う。



グループホームべてるの家、駅前ハイツからの通常期避難訓練：昌平町地区

グループホームべてるの家

べてるの家は標高10m付近に位置する。そこで津波警報発令を受けて避難するとき、より海側から避難して来る高齢者・障害者の手助けをしようという案が出され、地震発生後1分間は周囲の状況を確認めたり、手助けする時間とし、その後避難することを、もっとも理想的な目標とした。



駅前ハウス

駅前ハウスは津波浸水予想区域には入っていないが、避難先に行く途中で地崩れ危険区域を通ることになる。このため測候所のデータの読み方や地盤が緩んでいる兆候の見つけ方、避難するときに留意すべき点を考えていこうと話した。また大判地図を玄関前の廊下に貼り、いつでも見られるようにした。

9月15日、2つの住居からメンバーが築地地区の図上訓練へ参加し、避難経路と危険区域についての確認を行った。今後は火災、土砂災害をも想定した避難計画を立て、住居からの避難訓練を行うことが課題である。

2. 地域自治会との協力・防災活動への参加

浦河町は全国的に見ると精神障がい者が地域で暮らすことが受け入れられている地域と評価されているが、まだべてるの家と各自治会との協力関係は十分とはいえない。今年度は、浦河町役場（保健福祉課、総務課（防災担当者所属課）、社会教育委員会）と、浦河町主催の防災訓練の対象地域であった築地自治会、べてるとの合同防災訓練を実施することができた。この防災訓練実施にむけた合同会議を開催する中で、地域での防災の取り組みのための連携体制が現れてきた。

1) 築地自治会との防災訓練

築地自治会の地区に立地するこの2つの施設（ニューべてる、べてるセミナーハウス）の夏の訓練は、町役場が主催する防災訓練に自治会とともに参加、実施した。訓練後は築地自治会の方々とべてるセミナーハウス、ニューべてるからの訓練参加者合同で、浦河町役場駐車場での消火訓練、救急救命士によるAED講習などを受けた。

築地地区のべてる関連施設：通所授産施設ニューべてる・べてるセミナーハウス、GH潮見ハイツ・共同住居みかん

a) 事前準備

その1

9月12日、築地地区防災訓練の事前打ち合わせを行い、津波浸水予測図を利用して、各家の標高や一時避難先を確認したり、より安全に避難できる経路について話し合った。

参加人数約40名：浦河町3名、消防署1名、築地自治会約10名、他自治会1名、べてるメンバー20名、べてるスタッフ3名、国リハスタッフ5名

その2

9月20日、セミナーハウスの住人であり、ニューべてるのメンバー・スタッフが築地自治会による防災訓練事前打ち合わせに参加した。築地地区には高齢の方が多く、車椅子で避難する人も数名いるということが取り上げられたため、避難訓練ではセミナーハウスから避難する若い男性メンバーたちが、歩行に困難のある方の補助に行くことになった。

参加人数8名：築地自治会6名、べてるメンバー1名、国リハスタッフ1名



b) 避難訓練

9月25日（火）13時30分～

平成19年度浦河町防災訓練（対象地区：築地自治会）に参加した。

べてるセミナーハウス、ニューべてるの2ヶ所から同時に避難訓練を実施した。セミナーハウスでは、歩行に困難のある方の訪問を想定し、メンバーが代理で車椅子に乗り、他のメンバーが車椅子を押して避難した。最後に、炊き出しの食事を試食しながら振り返りを行った。

ア) べてるセミナーハウス

避難訓練の前には、べてるセミナーハウスから避難場所（日高支庁）までの避難経路をDAISY版避難マニュアルで確認した。

参加人数23名：浦河べてるメンバー8名、GHしおみ・共同住居みかん入居者5名、べてるスタッフ8名、国リハスタッフ2名、見学者8名程度

イ) ニューべてる

参加人数41名：ニューべてるメンバー18名、どんぐりの会メンバー9名、べてるスタッフ5名、家族1名、ボランティア1名、見学者7名



避難先での点呼。
メンバースタッフの清水さんが人数を確認した。

C) 振り返り

(1) べてるから

【よかった点】

炊き出しがおいしかった。

車椅子を押してみることができてよかった。

AEDなど、知らないことを知ることができてよかった。

みんなと一緒に避難することの良さと難しさを感じた。

(2) 築地自治会から

【よかった点】

13:30避難開始になっていて、予定時間30分前から集まっていた。そのとき車椅子にすわり、ブレーキなど確認したり、「ロープをつけるといい」「輪つけたほうがいい」というアイデアが出た。ロープをつけたグループは3分で標高8m付近まで来て、効果があることが分かった。

セミナーハウスに、若い人がこんなにいるとは知らなかった。

【さらによくする点】

リハビリに行くなどの理由で、2人車椅子利用者が不参加だった。日中はこの人員で避難することになる。日ごろから注意しておきたい。

車椅子を押すのは、思ったより大変だった。今後は手助けしてもらいたいと思った。

(3) 町役場から

【よかった点】

このような輪を広げていくために、町役場はきっかけを作る方法が一番いいと思った。

100人規模の炊き出しを通して、機材の確保など、普段気づかない点を確認することができた。

【さらによくする点】

13:30の地震の段階で、避難訓練開始の合図を広く周知できる方法を検討する。

(4) 国リ八から

【よくする点】

全体で賞味7分で避難先に到着し、平均タイムはまあまあ良かった。

【さらによくする点】

支庁前へ避難した人たちは標高10mに達していなかった。再確認してほしい。

炊き出しなんかをやってみないと、それぞれの自治会で経験してみるといいかも。そこまで考えた被害と訓練を計画してもよいのかも知れない。



町の防災事業に参加し、築地自治会の方とバケツリレーをした。

2) 東町第5自治会の防災学習への参加

8月7日 七夕行事の中で、防災に関する物語が紹介され、スタッフ、メンバーの有志が参加した。

2月24日 土砂災害被害予測地図の見方、救急救命士によるAED講習が開催され、スタッフ、メンバーの有志が参加した。地域の方とともに、人工呼吸や心肺蘇生を実際に練習することができた。



3) 防災フェスタへの協力

10月31日に開かれた町民推進協議会主催の防災フェスタにて、DAISY版避難マニュアルと、レインボーハウスの防災グッズを展示し、防災事業を通じた成果を公開した。会場の方へDAISY版避難マニュアルや防災グッズを準備したメンバーや担当者が、その紹介をした。



3. 他地域の視察と防災イベントの開催

浦河町ではこれまで大きな地震に見舞われながらも、幸い甚大な被害を受けたことが少ない。浦河町で想定される災害と類似の、津波による災害体験を持つ地域が行っている防災事業を参考にし、津波対策の知識と浦河で行われている防災事業や避難訓練で有効性が認められたスキルについて情報交換を行うため、北海道厚岸郡浜中町を訪問視察した。また浦河沖地震の専門家、津波対策の先進的取り組みを行っている自治体、障害を持つ専門家をお招きし、町内役場職員、自治会会長らとともに防災事業について話し合う防災フォーラムを開催した。



1) 浜中町への視察

北海道厚岸郡浜中町は、昭和27年の十勝沖地震、昭和35年のチリ沖津波において、合わせて死者14名、流失、全壊の住宅被害269戸の大きな被害を受けた。長年の取り組みを経て、防潮堤の設置、全住宅への防災無線の配置、海水の流入を調節するための水門建設など町全体での津波対策が整えられている。これらの先進的な取り組みについて訪問視察にて学び、町行政の立場から取り組めることについて説明していただいた。町行政のほか、べてるの家のような福祉施設、消防署、住民（自治会）など、それぞれの立場で取り組める事柄があり、それぞれが話し合いを重ねていくことが、より大きな安全を得る手がかりになることが分かった。

【訪問概要】

11月5日、以下の20名で訪問した。

浦河町役場3名、浦河町消防署1名、町内自治会2名、べてるの家メンバー8名、べてるスタッフ2名、国リハ・ATDOスタッフ4名

視察先：防災行政無線局、津波防災ステーション、水門、避難所（温泉施設）など



【振り返り】

浜中町では、津波による過去の被害体験を活かし、全住民が津波および避難関連情報を得られるように、防災無線の整備が進められていた。また津波浸水被害の軽減をはかり、津波被害が想定される港湾への堤防の設置、河口部の水門設置と管理システムといったハード面での防災対策が進められていることが分かった。参加者全体の振り返りでは、浦河町は直下型地震の震源地が近いことから、遠洋からの津波に備えている浜中町での取り組みとは異なるだろうという意見が出て、町役場、消防署、自治会などとの連携にむけた共同の合意点を得ることができた。なお、べてるでは、障害を持っている人も安全に逃げられるようにソフト面からの防災対策を行っているので、互いの防災事業の良いところを行かせるように、今後、情報交換を行っていききたい。

2) 防災フォーラムの開催

2月23日、浦河町文化会館にて「べてるの家の防災フォーラム」を開催し、浦河沖地震の特徴、自治体の防災への取り組み、障がいを持った人から見た防災対策の工夫についてパネルディスカッションを行った。パネリストからは、次のような知恵やヒントを教えていただいた。



浜大吾郎氏（徳島県美波町消防防災課）：南海地震発生による津波被害という切実な課題をかかえつつも、楽しくなければ続かないとして、避難のための体力づくり「防災みなみ体操」や避難訓練と遊山を掛け合わせた「避難まつり」をご紹介いただいた。べてるでも、メンバーが「防災の歌」を歌ったり、非常食の試食を楽しみながら避難訓練をしているため、防災も楽しみながら取り組むという点が通じていると実感した。

上田幸作氏（北海道浜中町総務課）：浜中町は昭和27年の十勝沖地震津波、35年のチリ津波にて大きな被害に襲われ、多くの人命が奪われた。この苦いの経験を生かして、浜中町では、町をあげて津波防災ステーションや防災無線の整備など、防災への努力が続けられている。平成15年の十勝沖地震においては、地震発生直後に水門が閉められ、事なきを得たという。過去の経験を生かす知恵の重要性を教えていただいた。

島村英紀先生（武蔵野学院大学）：海底地震の専門家の知見から、浦河沖地震には「海溝型地震」と「日高山脈直下型地震」の2種類があり、津波が起きるのは「海溝型地震」に多いこと、地

震や津波発生のメカニズムにも色々種類があることを教えていただいた。

木下富雄氏（浦河町東町第五自治会）：防災活動のモデル自治会として率先して取り組みをすすめてきた東町第五自治会より、車いすや担架を用意したり、消防の人とで訓練をしたなどの報告をいただいた。この避難訓練では、以前、子どもたちを守るためにシルバーPTAを組織したという経験が、大きな力になっていた。住みよい地域づくりのための取り組みは、べてるでも参考になった。

スティーブン・ショア氏（全米自閉症協会）：自閉症当事者であるショア氏は、緊張時にうまく対応するため、ご自分でニーズに応じた事前の準備をされている。災害時には即時に対応する必要があるため、自閉症を持つ人の特徴を書いたステッカーを持ち歩くなど、停電しても良いように、ローテクの道具を準備していることを教えていただいた。できること、あるものから準備すればよいことがわかった。

最後に、今年度の防災事業にご協力いただいた浦河町保健福祉課吉野氏、築地自治会高田氏から浦河町内の防災への取り組み方と今後の課題を報告していただいた。



4. 他の障がい者施設との連携

浦河町には、身体障害、知的障害など災害時に他の人の助けが必要となる人々が日中活動をしたり、入居している施設が複数ある。今年度は、それぞれの施設が開発してきた非常時での対応や、災害にあったときの体験、避難訓練について情報交換をした。それぞれの利用者の苦労の特徴に即した対策を持っていることが分かった。

浦河町内にある障がい者施設のうち、津波による被災が予測される標高に立地するはまなす学園、浦河向陽園に声をかけ、障がい者の防災について考える会議を設けた。

それぞれの施設には、津波または土砂災害についての危険があること、いずれも簡単には解決しにくい立地条件であることが意見交換の中で見えてきた。例えば境町にあるはまなす学園は、町中に立地しており、周囲は平地が広がり、車通りの多い道路が複数ある。避難経路の踏査では、地震発生に寄る津波から逃げるときには、風雨をさけられる堅牢な建物に入れるところで、標高10Mの高さがある場所までに4分で辿り着くのは非常に難しいことが分かった。非常時に、お子さんの送りにきた保護者に任せる、または当直の施設職員に任せるだけでは解決できない、安全な避難経路や、安全な避難場所を周辺住民や学校の方との間で共通理解を得る必要があるという現実を踏まえて、解決方法を見つけるために共に考える機会が大事であることが分かった。

今年度中には対応方法について完全な解決はできなかったが、自立支援法の施行に伴い、障害種別を越えた取組がこれまで以上に必要とされる中で、防災をきっかけとして情報交換の場が持てたことはとても有意義であった。

安心の秘訣2～避難グッズ

地震発生後、一次避難先にて最低12時間過ごすことができれば、海面の水位が下がり二次避難場所に移動するか、外部からの援助が可能になると考えられる。

12時間過ごすために必要な防災グッズについて共同住居・GHで話し合った。レインボーハウスとしおさい荘は、防災隊長（入居メンバー）が中心となって非常持ち出し用リュックを準備した。GHぴあ、GHフラワーハイツでも準備が進んでいる。



レインボーハウスの場合

8月2日より、レインボーハウスでは、あらかじめ12時間避難先に滞在する状況を想定して避難グッズの準備を行った。8月6日、再びミーティングを持ち、高知県の防災マニュアル「南海地震に備えちよき」を参考に必要な品を吟味した。最初はレトルト食品などに話題が集中したが、「生きるのに最低限必要なこと」は何かという点からの話し合いを行い、持病の薬、水、防寒具などを中心に必要なものをリストアップした。その話し合いを受けて、同日、メンバーが防災グッズの買出しに出かけた。最終的にそろえた防災グッズは、10月31日開催の防災フェスタ、2月23日開催の防災フォーラムにて展示した。また9月以降の避難訓練にてメンバーが使い、リュックの重さやアルミシートの防寒性などを確かめた。



清水さんが自分用に準備した避難グッズ

生理用品・乾パン・カロリーメイト・黒飴・ガムシロップ・三角巾
携帯用カイロ・ストーンチョコ（チョコレート菓子）・ガーゼ
水（500ml）1本・薬・日本手ぬぐい・バスタオル・ウェットタオル
・・・あとiPodがあるといいなあ



しおさい荘の場合

1月中旬から下旬にかけて、防災隊長（メンバー）を中心に個人用、住居用の非常持ち出し用リュックを準備した。住居用リュックでは、入居者全員が安全に過ごせるように食べ物や防寒具が準備され、個人用リュックではそれぞれが薬や服薬用の水、嗜好品、衣類などを準備することとした。住居用の非常持ち出し用リュックは冬期避難訓練でメンバー（入居者）が背負い、避難場所まで歩いても十分に運べることを確認した。2月23日開催の防災フォーラムにて展示した。



しおさい荘用に準備した避難グッズ（11人分）

水（500ml）・紙コップ・紙皿・割り箸・乾パン・桃の缶詰・ラーメン
非常食用パン・軍手・ウェットティッシュ・防寒アルミシート・タオル
携帯用カイロ・LEDホイッスル・簡易トイレ・万能ナイフ・ライター
ラジオ付手回し充電器

IV.この取り組みからみてきたこと

1. メンバーが参加する避難訓練のステップ

各住居、活動拠点の防災隊長を決め、その人を中心に避難訓練の時期や場所、防災グッズについて日常のミーティングで繰り返し相談すると、避難訓練もSSTや当事者研究のように、メンバーが自分達の身体で学習し、避難訓練をより良く工夫しやすいことがわかった。DAISY版避難マニュアルの作成でも、DAISYチームと一緒に避難経路の下見に行き、マニュアルをつくってもらいと、より避難するときの注意事項が分かりやすい。避難訓練の日と時間をミーティングで決めたら、以下の順番で避難訓練を進めると良い。

【避難訓練当日の進め方】

- ①その日の設定・テーマを確認する（SST方式）
- ②防災みなみ体操で体をほぐす
- ③地図で避難経路を確認する
- ④先頭・最後・車椅子を押す人・防災グッズを運ぶ人・懐中電灯やトランシーバーをもつ人など役割を確認する
- ⑤合図と共に避難開始
- ⑥避難中はできるだけ記録をとる（ビデオ・写真）
- ⑦10メートルの高さに達する時間を計る
- ⑧避難場所で集合し、集合写真をとる
- ⑨戻って振り返りをする：よかった点、苦労した点、もっとよくなる点



2. 防災を通じて強まった、協力合う雰囲気

本年度の防災事業を通じて、防災グッズを皆で考える、一緒に避難するといった体験を重ねて、メンバーやスタッフの間で絆がさらに深まったり確認できたりした。べてるの住居では、働いているメンバー、デイケアに通っているメンバー、引きこもっているメンバーなどさまざまな人が暮らしており、一人一人がそれぞれのリズムで生活している。時には協力し合うことがなかなか出来ないこともある。防災事業は避難方法などを住居ミーティングで考え、振り返りをするので、今まで以上に、一人ひとりの苦労を伝える機会となった。

特に共通の課題として、防災への取り組みを通じて、地震や津波災害に関連した漠然と気になっていた不安（「いざという時幻聴さんがやってきてパニックになってしまうかもしれない」、「眠剤がないと眠れないけど、災害時に起きられなかったらどうしよう」など）を、みんなで考える共通のテーマとして再確認することができた。

3. 町内の人たちとのきずなを深められた

浦河町民にとって防災対策は思った以上に共通の関心事となっており、自治会／町役場と一緒に避難訓練に参加したときは思った以上共通の課題を持っていることに気づいた。そして、当たり前のことだが、地元の方は、具体的な建物の建て方や町内の地盤の特性をよく把握していて、べてるも今後学習していく必要があると思った。

同じように、防災をキーワードに、はまなす学園・浦河向陽園とのつながりをはじめることができた。

4. 町外の人との防災対策ノウハウの交換

浜中町、美波町との交流がはじめられ、お互い防災対策の良さを学びあうことで、自分たちの防災対策が充実していくことを実感した。

V.さらによくする点～今後に向けて～

1. より過酷な状況における防災訓練の実施

今年度は十勝沖地震の発生に伴い、火災および津波警報発令を想定し、避難計画と避難マニュアルを各活動拠点・各住居向けに作成し、それぞれ夏期・冬期の2回の避難訓練を実施した。今後は、大雨後に地震が発生した場合に、土砂災害危険地区でも安全な避難経路と避難場所が確保できるか検討する。また厳しい条件下（雨天時、夜間等）での避難訓練を実施する。

2. 幻聴が聞こえていたり、眠剤が利いているメンバーの避難方法の開発

取り組みを通じて、幻聴さんが来ているとき・眠剤が利いているときは、仲間の声かけや手助けがあっても避難できないのではないかという、共通の苦勞が明らかになってきた。このような緊急に避難しなければならないときの対応方法についてメンバーとともに話し合い、避難訓練で練習する。

3. 発達障がい傾向の強いメンバーへの対応方法の開発

べてるの家のメンバーは主として精神障がいをもつ人であるが、発達障がい傾向を持つ人も相当数に上がることがわかってきている。今年度、スティーブン・ショア氏より得た助言から、そのような傾向のある利用者への新たな対応方法の開発が可能であることがわかってきた。適時の避難と避難先での生活に対応できるための発達障がい者向けのノウハウを蓄積する。

4. 他の要援護者施設の防災活動支援

今年度は他の要援護者施設や役場と連携し防災会議を開き、ニーズの掘り起こしを行った。この経験を活かし、他の要援護者施設それぞれ

に、DAISYによる避難マニュアルを作成・提供するほか、べてるが培った避難訓練のノウハウを提供する。

5. 町内自治会、商店会等との防災活動協力

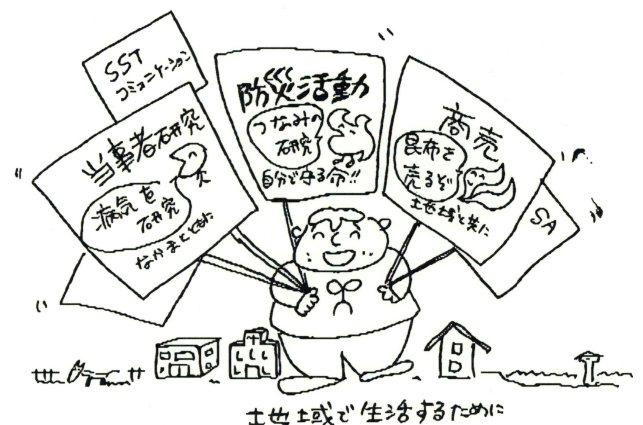
今年度の築地地区の合同防災訓練で得られた知見を活かし、築地自治会との協力を維持しながら、他の自治会でもべてるの活動拠点および住居と合同で防災訓練を実施する。そのほか家族または独居で共同住居以外の個人宅に住むメンバーについても、各自治会と連携をとりながら避難訓練を行う。

6. 先進地域への訪問と防災ノウハウの相互提供

本年度、交流した徳島県美波町では、地域ぐるみの防災活動が行われている。美波町での活動を視察し、べてるが培ってきた防災活動との情報交換を継続的に行う。

7. 町内向け啓発講演会の開催

浦河町教育委員会と協力し、引き続きべてるの家の避難訓練、他地域を訪問して得た情報、他の要援護者施設との協力関係で得られた普遍的な要素等を町民に発信する。



VI.国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所から

河村宏、八巻知香子、間宮郁子(国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所)
濱田麻邑(支援技術開発機構:ATDO)

なぜ浦河で？

国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所(以下、国リハ)のスタッフが、初めて浦河を訪問したのは、平成15年の十勝沖地震の1ヶ月後でした。その頃には、高度な装置の開発だけは本当に生命を守ることはできず、地域の連帯が必要だという結論が得られていました。精神障がいや自閉症など、社会から理解が得られていない障害をもつ人たちは、地域からの孤立という点で問題は最も深刻です。どこか、障害を明かしながら、地域の人たちと助け合い、ともに防災活動に取り組めるところはないかと探していたとき、べてるの家の講演会を聞きました。早坂潔さんや清水里香さんが、自分たちの経験を見事に言葉にしているところを見て、「ここしかない」という思いを強くしました。

また、浦河では大きな地震が多発しているにも関わらず、死者も火事も出していませんでした。東京大学新聞研究所(現在の社会情報研究所)の調査でも、住民の皆さんの地震への備えが極めて優れていることが報告されています。この浦河だからこそ、全住民の安全な避難というさらに一歩進んだ取組ができると考えました。

今年度に至るまで

平成16年度から18年度にかけて、「科学技術振興調整費」という研究費を得て、本格的に障害者の防災に関わる研究を開始しました。私たちの仮説は「正確で、かつ分かりやすい避難マニュアルが提供でき、本人がきちんと理解し、練習することができれば、重度の認知・知的障害を持つ人も安全に避難できるようになる」というものでした。そのために取り組んださまざまなことのうち、べてるの防災に直接関わるのは以下の点です。

- べてるのメンバーと一緒に浦河の地震や津波についてのミーティングをする
- 安全な避難場所をさがし、避難方法についてのDAISYのマニュアルをつくる

・分かりやすいマニュアルになるように、メンバーと一緒に改善を重ねる

べてるの家のSSTやミーティングの技法は、本人が自分で解決したい課題を提示し、どうすればよいかポイントを絞り、やさしい言葉で話し合い、練習する手法で、防災にもぴったりでした。

べてるの家の事業になってから

この一年ですっかり、防災への取り組みがべてるの事業となり、自分たちの事業として、町や地域に貢献するべく展開するようになりました。また多くのメンバーが避難訓練やその準備に参加するスタイルも確立されました。なかでも、マニュアルづくりのために他のメンバーを誘って下見にいたり、その様子を報告をしながら防災活動を引っ張ってくれたDAISYチームの皆さんの様子を、とてもうれしく思っています。

幻聴さんにジャックされているメンバーと一緒に避難することは、まだ完全に解決できていない課題ですが、べてるの皆さんはきっと解決方法を見つけてくれると信じています。そして、べてるの皆さんが開発したノウハウは日本全国のみならず、世界のあちこちで活かされていく知恵に違いありません。



